

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：33801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520651

研究課題名(和文) 韓国人日本語学習者のための読解能力尺度開発に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental study on development of reading proficiency scale for Korean learners of Japanese

研究代表者

谷 誠司(TANI, Seiji)

常葉大学・外国語学部・准教授

研究者番号：80514827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は韓国人日本語学習者を対象に、CEFR読解尺度の適用可能性の検証、CEFR読解尺度のCDS(能力記述文)のわかりやすさの検証、CEFR読解尺度の現地化の試み、を研究目的とした。

は全体的にCEFRの順序性は維持しているが、葉書、自分の専門分野、親しい人との手紙のやり取り、辞書使用といった記述があると易しくなり、日常生活で出会う機器についての簡単な使用方法、広告、パンフレット、メニューなどの記述があると難しくなることが明らかになった。は条件や補足説明の修飾部が長いCDSや具体的な範囲やレベルの解釈に幅のある表現を含むCDSはわかりにくいという結果が出た。は暫定的な尺度を開発した。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this study are 1) verification of the applicability of CEFR reading scale to Korean Japanese learners, 2) verification of clarity of the CEFR reading scale's descriptors for Korean Japanese learners, 3) development of localized CEFR reading scale for Korean Japanese learners.

Results of 1) show overall difficulties of descriptors in CEFR reading scale are maintained in Korean Japanese learners, but descriptors contained postcards, my field, exchanges of letters with the familiar person, and dictionary use become easier than expected in CEFR, on the other hand descriptors contained simple instructions on equipment encountered in everyday life, advertisements, brochures, and menus become more difficult. Results of 2) show descriptors contained long supplementary explanation and conditions, and descriptors with ambiguous expression about range and level are difficult to understand. Result of 3) is development of localized CEFR reading scale for Korean Japanese learners.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育 韓国人日本語学習者 CEFR 読解能力尺度

1. 研究開始当初の背景

近年、外国語教育において外国語で何ができるのか(Can-do)という考えのもとに記述された言語能力尺度に関心が集まっているが、その中で欧州評議会の Common European Framework of Reference for Languages (以下、CEFR)が特に注目を浴びている。CEFRはヨーロッパ内の言語教育のシラバス、カリキュラム、教科書、試験の作成時、及び学習者の能力評価時に共通の基盤を与えるために制定された枠組みで、特にレベルを6段階に分けそれぞれのレベルで到達可能な行動をCan-doの形式(能力記述文、以下「CDS」)で示した言語能力尺度が特徴である。

研究代表者は2006年にCEFR読解尺度に基づいた日本語読解テストの開発を行った。その際、後述するようにCEFR読解尺度のCDSの不備を始め、ヨーロッパで開発された言語能力尺度であるCEFRをアジアの言語である日本語に適用してよいのかという根本的な問題にぶつかった。

CEFRが日本の外国語教育に広く導入される中、同じような問題意識を持った研究者によって日本におけるCEFR言語能力尺度の適用可能性を検討する研究が行われている。

英語教育の分野においては、Nekoda, et al(2004)、中島・永田(2006)、根岸(2006)では自己評価法を援用して日本人外国語(英語以外を含む)学習者へのCEFRの適用可能性を検討している。Nekoda, et al(2004)、中島・永田(2006)ではおおむね適用可能性を肯定する結果が出たが、中島・永田(2006)では「聞く」「読む」の自己評価結果がCEFRで想定されている難易度の順序と異なる結果が出ている。根岸(2006)は中島・永田(2006)の研究でCEFRの想定順序と異なったCDSを取り上げ、詳細な具体例を共に提示することで自己評価の精度が改善されるかを調査し、4技能すべてにおいて具体例の提示が精度向上につながったと報告している。

日本語教育での先行研究としては、大隈他(2006)がある。大隈他(2006)ではJLPTのCDSとCEFRのCDSを比較し総合的に同一レベルにあると見られるCDS(聴解・読解・ライティング)を選択し、このCDSを使用して日本語能力試験受験者(母語複数、1068名)を対象に自己評価調査を行った。その結果、「聴解」と「ライティング」の自己評価結果はCEFRの想定している困難度とおおむね一致していたが、「読解」の自己評価結果は一致していないことが明らかになり、不一致の原因として漢字の影響を示唆している。

以上のことからCEFR言語能力尺度が欧州以外の外国語学習者や言語においても適用が可能であると言えるが、特に読解において日本人英語学習者や日本語学習者の違いに関係なく、CEFRの想定順序とは異なる自己評価結果が出ているため、再調査が必要である。

加えて、CEFRのCDSに対して、記述に一貫性がなく抽象的かつ曖昧で分かりづらいと

いった不備が指摘されており(Weir,2005,Alderson et al,2006,Davidson & Fulcher,2007、田中、2007)、これが原因で回答者の解釈に個人差を生じさせた可能性も考えられ、記述内容をより明確にする必要がある。

更に「JF日本語教育スタンダード」のような汎言語的な能力尺度は全体の指標として必要であるが、第2言語習得において母語の影響は排除できず、また教育観・教育制度が国によって異なることから、母語別の日本語能力尺度開発は今後ますます必要とされる。

合わせて、長沼(2008)によると、CEFRのような尺度は利用者を限定しない一般的な能力記述がなされているため、実際の教室現場で適用することが難しく、CEFRをレベル参照する外部指標として用いながら、それぞれの教室の文脈や学習目標に合わせた、内部指標としての言語能力尺度を開発する必要があると指摘されていることから、能力記述が海外の学習者の状況に対応している「現地化(localization)」したものが求められている。

2. 研究の目的

(1)CEFR読解尺度の適用可能性の検証

韓国人日本語学習者と韓国人日本語教師からCEFRのCDSの難易度に関する評価データを集め、CEFRが想定したCDSの順序性が見られるかを明らかにし、順位性が見られないCDSに対してその原因を検討する。

(2)CEFR読解尺度のCDSのわかりやすさの検証

CEFRのCDSのわかりやすさについて韓国人日本語学習者と韓国人日本語教師からデータを集め、わかりにくいと感じるCDSを見つけ、その原因を検討する。

(3)CEFR読解尺度の現地化(localization)の試み

日本教育の分野でこれまでに開発された読解尺度を調査・分析し、CDSがどのように記述されているかを明らかにし、韓国人日本語学習者用読解能力尺度(版)の開発を試みる。

3. 研究の方法

(1)CEFR読解尺度の適用可能性の検証

韓国人日本語学習者と韓国人日本語教師を対象にそれぞれ調査を行った。

<韓国人日本語学習者>

協力者：韓国の大学で日本語を学習している韓人大学生および大学院生361名(ソウル：K大学(110名)、D大学(46名)、プサン：S大学(205名))

調査時期：調査は3回に分けて行った(1回目：S大学で2011年11月～12月、2回目：K大学で2012年5月、3回目：K大学とD大学で2012年12月)

調査手順：授業時間内に簡単な説明とともに調査票を配布し授業時間外に回答しても

らい、その後回収した。

調査票

- a. CEFR-DIALANGにある読解CDS(31項目)を使用した。原文は英語で書かれているので、根岸(2006)の参考資料を参考に日本語訳をし、さらに日本の大学院(社会学系の修士課程)を修了した韓国人に韓国語に翻訳してもらったものを使った。各項目への回答は、根岸(2006)の指摘や大隈他(2006)の例に従い、まずその項目内容の経験有無をチェックし、経験があれば「1. 全然できなかった」から「5. 問題なくできた」、経験がなければ「1. 全然できないと思う」から「5. 問題なくできると思う」の5件法で該当するところにチェックすることによって得た。
- b. 学年、専攻、日本語学習期間、日本語関連能力試験の成績などについての情報を得るためにフェイスシートを作成した。こちらも質問および回答はすべて韓国語にした。

< 韓国人日本語教師 >

協力者：韓国の大学や高校などで日本語を教えている韓国人日本語教師 30名(大学(21名)、高校(6名)、不明(3名))

調査時期：2012年7月～10月

調査手順：電子メールで調査票を送付し、回答を記入してもらった調査票を電子メールで返送してもらった。

調査票：

- a. 韓国人日本語学習者の調査で使用したCEFR-DIALANGにある読解CDS(31項目)と同じものを使った。各項目への回答は、CEFRが6段階のレベル分けをしていることから、6段階(1. 初級(下) 2. 初級(上) 3. 中級(下) 4. 中級(上) 5. 上級(下) 6. 上級(上))の中から1つ選んでもらった。
- b. 日本語教師歴(年数)、韓国での日本語教師歴(年数)、読解の授業経験の有無、勤務校などについての情報を得るためにフェイスシートを作成した。こちらも質問および回答はすべて韓国語にした。

(2) CEFR 読解尺度の CDS のわかりやすさの検証

韓国人日本語学習者と韓国人日本語教師を対象にそれぞれ調査を行った。

< 韓国人日本語学習者 >

協力者：韓国の大学で日本語を学習している韓国人大学生および大学院生 100名(ソウル：K大学(31名)、D大学(43名)、済州：J大学(26名))。回答協力者全員が新 JLPT で N2 か旧 JLPT で 2 級以上を持っている。

調査時期：調査は2回に分けて行った(1回目：J大学で2012年9月、2回目：K大学とD大学で2012年12月)

調査手順：授業時間内に簡単な説明とともに調査票を配布し授業時間外に回答してもらい、その後回収した。

調査票

- a. 猫田(2007)を参考にして、CEFR-DIALANGにある読解CDS(31項目)に対してイメージのしやすさを4件法(「1. とてもイメージしにくい」～「4. とてもイメージしやすい」)で判定してもらった。また、わかりにくい記述があれば、そこに下線を引き、その部分に関して自由回答してもらった。
- b. 学年、専攻、日本語学習期間、日本語関連能力試験の成績などについての情報を得るためにフェイスシートを作成した。こちらも質問および回答はすべて韓国語にした。

< 韓国人日本語教師 >

< 韓国人日本語教師 >

協力者：韓国の大学や高校などで日本語を教えている韓国人日本語教師 30名(大学(21名)、高校(6名)、不明(3名))

調査時期：2012年7月～10月

調査手順：電子メールで調査票を送付し、回答を記入してもらった調査票を電子メールで返送してもらった。

調査票：韓国人日本語学習者で使用したものとはほぼ同じ。日本語教師歴(年数)、韓国での日本語教師歴(年数)、読解の授業経験の有無、勤務校などについての情報を得るためにフェイスシートを作成した。こちらも質問および回答はすべて韓国語にした。

(3) CEFR 読解尺度の現地化(localization)の試み

既存日本語読解尺度の調査及び分析

日本国内の日本語教育機関や日本語能力テストで開発された日本語読解尺度を調査し、どのような枠組みからCDSを記述しているかを分析した。

CEFR 読解尺度の現地化(localization)の試み

これまでの研究結果に基づき、日本人研究者と韓国人研究者によるチームを組織し、韓国の日本語学習環境・日本語使用環境・特性を考慮した読解能力尺度開発を行った。

4. 研究成果

(1) CEFR 読解尺度の適用可能性の検証

< 韓国人日本語学習者 >

CEFR-DIALANGの読解CDSの順位性が韓国人日本語学習者にも当てはまるかをラッシュモデルの分析ソフト(WINSTEPS ver3.73)で分析した。この調査では質問紙を使用しているので、Bond and Fox(2007)に従い、ミスフィットの基準を0.6～1.4の範囲にした。全データを分析した結果、ミスフィットに該当した回答者を除き、168名のデータを使って、再分析した。その結果、外れ値の影響を抑えたインフィット値を見ると、3つのCDSがミスフィット(underfit)と判断された。ミスフィットと判断された3つのCDSのうち、26(B2)は「広汎な語彙力を持っているが、頻度の低い語彙や句にはいくらかてこずる」とあり、読解ではなく、語彙力に関する記述が

その原因と考えられる。また残り2つのCDSのうち、29(C1)は「ときどき辞書を使用すれば、どんな文書でも・・・」31(C2)は「実質的にあらゆる形式の書きことば」とあることから、「どんな文書」や「あらゆる形式の書きことば」は逆にイメージしにくいことが原因と推測した。

また、算出された困難度値順(通常、-3が最も易しく+3が最も難しい)にCDSを並べ、数値が上がるところとその周辺にあるCDSのレベルを勘案して暫定的な分割点を設定した。全体的な傾向としてはCEFRの順序性と一致しているが、12個のCDSが暫定的な分割点から外れていることが明らかになった。順位性が異なったCDSを分析したところ、次のような特徴があることが示唆された。(1) 葉書、自分の専門分野、親しい人との手紙のやり取り、辞書使用、といった内容が含まれるCDは想定しているレベルより易しくなった。(2) 日常生活で出会う機器についての簡単な使用方法、広告、パンフレット、メニューなどは難しくなった。

さらに、本調査の協力者に新JLPTの合格級を自己申告してもらい、新JLPTの取得級によって自己評価のCDS平均値がどのように変化するかを調べた。新JLPTのN1合格者～N3合格者の各CDSに対する平均値は図1のようになった。

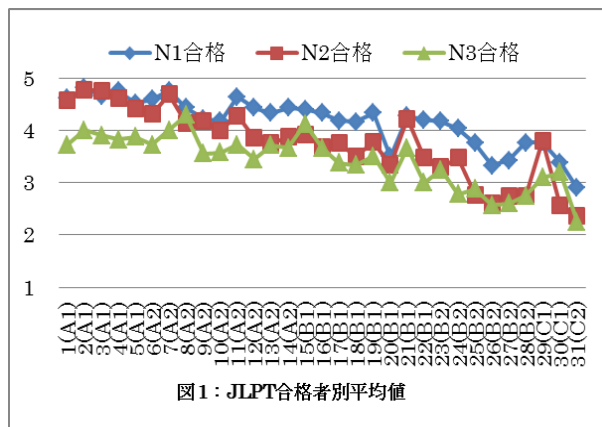


図1: JLPT合格者別平均値

1～10までのCDSはN1とN2の間に平均値の差がない。レベルがA1とA2のCDSなので、差が出ないと思われる。また、21(B1)と29(C1)はN1とN2の間で差がない。CDSの記述内容(21「個人の手紙を読んで、友達や知り合いと文通」、29「ときどき辞書を使用すれば、どんな文書でも」)から「友人間での手紙」や「辞書使用」という部分が原因と考えられる。8(A2)・13(A2)・15(B1)・23(B2)・25～28(すべてB2)・30(C1)はN2とN3の間では差がなかったり逆転していたりする。下位レベルのCDSの記述内容(8「自分の仕事に関連した短くて簡単なテキスト」、13「公衆電話のような、日常生活で出くわす機器についての簡単な使用方法」)から「短くて簡単」「日常生活で出くわす機器の使用方法」という部分が原因と考えられるが、項目困難度の分析では13はCEFRの想定レベルより難しくなっ

ており、結果が矛盾している。また、N3程度の学習者はB2以上のCDSを正確に自己評価できない可能性がある。

< 韓国人日本語教師 >

すでにデータ分析は済んでいるが、成果を発表するまでに至っていない。今後、論文にまとめる予定である。

(2)CEFR 読解尺度のCDSのわかりやすさの検証

< 韓国人日本語学習者 >

猫田(2007)では平均値2.5以上であればわかりやすいCDSと判定したが、本調査では2.5以下のCDSがなかった。従って、猫田の基準に従えば、CEFR-DIALANGの読解CDSの記述は韓国人日本語学習者にわかりやすいと言える。しかし、平均値が3.0を切っていたり、相対的に平均値が低いCDSもあったりした。

そこで、否定的な選択肢(1・2)を選んだ回答者が全体の20%を超えたCDS(25・26・27・31)やほぼ20%であったCDS(6・30)の自由コメントを調べた。25(B2) (「読む目的やテキストの種類に応じて読む速度や読み方を変えながら、様々な種類のテキストをかなり楽に読むことができる。」)では「読み方」(13名)・「読む速度」(9名)・「テキストの種類」(7名)に対してより説明を求めるコメントが多かった。26(B2) (「広汎な語彙力を持っているが、頻度の低い語彙や句にはいくらかてこずるかもしれない。」)では「広汎な語彙力」(14名)と「頻度の低い語彙や句」(2名)により説明を求めるコメントが多かった。27(B2) (「さらに詳細に読む必要があるかどうかを決定するために、広範囲にわたる専門的な話題についてのニュース、記事、レポートの内容と関連性をすばやく確認することができる」)では文章全体が意味不明(10名)、「ニュース、記事、レポートの内容と関連性」(4名)と「専門的な話題」(2名)により説明が必要というコメントが多かった。31(C2) (「抽象的であったり、構造的に複雑であったり、高度に口語的であるような、文学的な文章や非文学的な文章を含む、実質的にあらゆる形式の書きことばを理解し、解釈することができる。」)では「実質的にあらゆる形式の書きことば」(8名)、「高度に口語的」(3名)に対して説明を求めるコメントが多く、文章全体が長すぎる(5名)というコメントが目立った。6(A2) (「もっとも頻度の高い単語で書かれていたり世界的に共通して使われる単語を含んだりする短くて簡単なテキストを理解することができる。」)では「世界的に共通して使われる単語」(22名)と「もっとも頻度の高い単語」(7名)に、30(C1) (「もし難しい箇所を読み返すことができれば、それが自分の専門分野に関連していなくても、新しい機械や手順についての長い複雑な説明を細かいところまで理解できる。」)については「文章全体が分かりにくい」(2名)と「もし難しい箇

所を読み返すことができれば」(2名)に対するコメントが多かった。

< 韓国人日本語教師 >

すでにデータ分析は済んでいるが、成果を発表するまでに至っていない。今後、論文にまとめる予定である。

(3) CEFR 読解尺度の現地化(localization)の試み

既存日本語読解尺度の調査及び分析

日本国内の日本語教育機関や日本語能力テストで開発された日本語読解尺度を調査した。その結果、以下の10点の尺度があることが分かった。a. 三枝(2004)「旧日本語能力試験の妥当性検討のための外的基準としてのCDS」, b. 島田・谷部・斎藤(2007) & 島田・野口・谷部・斎藤(2009)「東京学芸大学留学生センターが開講する日本語科目のクラスレベルを説明するCDS」, c. 村上(2008)「名古屋大学留学生センターで開講される日本語教育科目のクラスレベルを説明するCDS」, d. 村上(2009)「A市に在住する外国人就労者の日本語学習支援を目的とするCDS」, e. 国際交流基金「JF-Can-do」, f. 国士舘大学「外国語ポートフォリオ」, g. アジア人財資金構想共通カリキュラムマネジメントセンター「日本語チェックリスト」, h. 東京外国語大学(2011)「JLC日本語スタンダード2011改訂版」, i. 国際交流基金・日本国際教育支援協会(2012)「日本語能力試験Can-do自己評価調査レポート 最終報告」, j. 日本貿易振興機構(2008)「BJTビジネス日本語能力テストのCANDOレポート」。

これらの尺度がどのような枠組みからCDSを記述しているかを分析するために、塩澤他(2010)の4つ観点((a)行動,(b)話題・場面,(c)対象,(d)(制約)条件)から分析した。その結果、以下のようなことが明らかになった。

- (1)「行動」に関する記述が「読んでわかる」「わかる」「理解できる」と記述され、具体性が欠け、どのような状態になっていけばわかったり理解していたりするのかが不明瞭であるものがある一方、「文中の修飾関係が読み取れる」や「要点が理解できる」といった記述は具体性があり、記述された行動が明瞭であるものもある。
- (2)「対象」に関する記述が単純にテキストタイプを記述するもの(例:レポート、手紙など)とより詳細な説明がつくもの(例:敬語が使われている正式な手紙やメールなど)がある。
- (3)CDS開発時に想定するCDS利用者の置かれている立場や環境によって記述内容が大学などの教育の領域に重点を置くか、職業領域やより一般的な日本での日本語による生活に重点を置くかとい

った変化がみられる。

(4)言語知識に関する記述はh.東京外国語大学(2011)以外の尺度では含まれていない。

CEFR 読解尺度の現地化(localization)の試み

これまでの研究成果を踏まえ、日本人研究者と韓国人研究者によるチームにより韓国の日本語学習環境・日本語使用環境・特性を考慮した読解能力尺度開発を行った。現在、専門家によるフィードバックを受けているところで、成果を発表するまでに至っていない。フィードバックに基づき、修正を図り、今後、論文にまとめる予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

谷誠司(2012)「韓国人日本語学習者を対象にしたCan do statements 調査の分析 項目応答理論を利用して」『同日語文研究』第27集 357~370 同日語文学会

谷誠司(2012)「韓国人日本語学習者用漢字テスト開発のための語彙テストに関する基礎的研究」『常葉学園大学外国語学部研究紀要』第28号 253~272

谷誠司(2012)「韓国人日本語学習者のための漢字テスト開発に関する基礎的研究」『常葉学園大学教育学部研究紀要』第32号 123~136

谷誠司(2013)「日本語教育で開発された読解Can-do statementsに関する基礎的調査」『常葉学園大学教育学部研究紀要』第33号 349-364

谷誠司(2013)「常葉学園大学外国語学部グローバルコミュニケーション学科における韓国語Can-do statements開発のための基礎的調査研究」『常葉学園大学外国語学部研究紀要』第29号 37-50

谷誠司・戸田裕司・福島みのり・増井実子(2014)「CEFRに基づく『GC四言語レベルゲージ』の設定」『協働学習研究』第1号 3-12

増井実子・谷誠司(2014)「本学スペイン語初級学習者の語彙学習に関する予備的研究 到達度指標作成にむけて」『協働学習研究』第1号 13-21

[学会発表](計2件)

谷誠司(2013)「CEFRの韓国人日本語学習者への適用可能性」, 2012年度日本語教育学会第10回研究集会、甲南大学

谷誠司(2013)「CEFR(Common European Framework of Reference for Languages)読解尺度の韓国人日本語学習者への適用可能性に関する調査研究 能力記述文(CDS)の困難度と分かりやすさを中心に

「韓国日本研究団体第2回国際学術大会、
韓国・嘉泉大学校
〔図書〕(計1件)
谷誠司(2013)『日本語教育研究の最前線
2013』韓国日本語学会編、チェックサラン
「CEFR のこれまでの研究動向と今後の展
望」(12頁)担当
〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷 誠司 (TANI SEIJI)
常葉大学・外国語学部・准教授
研究者番号：80514827

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：